

## 批評と紹介

## 敦煌変文研究の動向 (二)

— 変文の本質、総論に関する研究 —

金 岡 照 光

既に述べた通り、変文の研究はここ数年來着実な原典解説にもと  
 づく基礎的な研究が、活発になつて來ている。こうした成果によつ  
 て、今後ますます変文の歴史的な迹づけが明らかにされていくであ  
 ることは、十分期待出来る。然しながらすでにしばしば触れた通  
 り、変文の定義、範疇、実態に関する問題は、多くの先学たちの努  
 力や成果にもかかわらず、今日なお不分明な点が多く、それが資料  
 集の採録基準の上に、いちぢるしく曖昧なものを齎らしたのであ  
 る。これらの問題も、今後基礎的な資料研究が進展するにつれて、  
 それぞれ解明されていくであろうが、こうした研究に加えて、宗教  
 史、美術史、音楽史等多くの隣接諸科学の広範な研究が必要とされ  
 る。

そこで今日までに各国の研究者たちの変文の本体に関する諸研究  
 を通観して、現在の時点における問題の所在を明らかにすることが  
 必要なのではないかと思われる。網羅的に全ての研究成果を紹介す

ことは紙数が許さないので、前回同様、重点的な紹介と検討になる  
 ことをあらかじめお詫びしておく。そもそも変文という文学の範疇  
 が、現在においてはきわめて拡大され、ある意味では敦煌出土の文  
 学関係の写本すべてに流用されているかの感があることはすでに述  
 べた。現在なおその観点が生きていることは、王重民氏等編「敦煌  
 変文集」に収録されている七十八種の原典は、講唱体、韻文体、散  
 文体、さまざまなスタイルをふくみ、変文と名づくるもの、講経文  
 と名づくるもの、押座文と名づくるものすべてを包含しており、資  
 料集としての価値はそれにより一層高められてはいるが、変文とい  
 うものの本体は、そのために甚だ把握し難いものとなつてしまつて  
 いる。しかしながらこの観点は、他の研究者にもそのままうけつが  
 れ商務印書館「敦煌遺書総目索引」(一九六二年)においても「敦  
 煌変文殘卷目錄」(上掲書三四八頁—三五二頁)においても「敦  
 煌變文殘卷目錄」(上掲書三四八頁—三五二頁)においても「敦  
 煌變文殘卷目錄」(上掲書三四八頁—三五二頁)に六十四種の原写  
 本が収録されており、それは「敦煌變文集」に依拠したものである  
 旨注されている。「敦煌變文集」の七十八種に比し十四種減じてい  
 るのは、燕子賦一種、太子成道經一種、太子成道變文四種、仏説阿  
 弥陀經講經文一種、妙法蓮華經講經文一種、維摩詰經講經文一種、  
 父母恩重經講經文一種、不知名變文二種、搜神記一種、孝子伝一種  
 がそれぞれ異本として整理統合されたり、あるいは記載されなかつ  
 たりしたためである。その未収録、整理統合が如何なる基準によ  
 り行われ、「変文集」とことなる点を示すに至つたかは、不明であ  
 る。

又前述のウエリー(A. Waley)の「Ballads and Stories

from Tun-huang」においても、「変文訳集」とは銘打っていないが、「敦煌変文集」より二十四篇を訳しており、その中厳密な意味で変文と思われるものは九種である。このように変文のカテゴリは甚だ曖昧であり、現在なお明確な定説はない。そこで今迄に述べられた変文の定義、範疇、実態に関する諸説を紹介検討して見よう。便宜上、中国、日本、欧州にわけ、それぞれの主たる業績のパススペクティブを眺め、併せて研究の動向、問題の所在について一言したい。

## 二

一言にして中国と日本における変文研究の方向の差異を明らかにすることは不可能であるし、又相互の研究が相互に影響し合っている事実からいえば、余り意味のないことかも知れない。然しながら、そうしたことを配慮しても尚且両国の研究の間には、たしかにことなる性格が見え(勿論共通する問題も多いが)彼我各々が他の有せざる特色をそなえている事実を見ずぐすことは出来ない。それは中国における研究は主として説唱という文体、講経というジャンルの書誌的な考察が重視されていたのに対し、日本の研究は、変相という絵画に即して、仏教史、美術史等隣接諸科学の傍証を用いる研究が盛んであったことである。最近では中国においても変文と変相画の関連について論及するものも出て来たが、全体として見るとき、変文と変相画の相関々係を重視するのは日本の研究者に多い特色ということが出来よう。そして中国の研究が文献学的に、

語学的に、即ち資料の基礎的研究の面でいちぢるしい成果を挙げているのに対し、日本の研究はそうした面では、原写本を有せざる国のためか、中国に及ばないが、前述の如く、各分野での変文に対するさまざまな角度からの研究がさかんで、中国に比し、広範且つ多様な研究成果を生み出していることに注目しなければなるまい。

中国において変文を文学史の潮流の中におき、これを講唱文学というジャンルに定着させたのは鄭振鐸氏であろう。鄭振鐸氏の変文に関する所論はきわめて多く、その初期の所説と後の説とはかなりことなる点もある(俗文と変文の区別を立て、後に変更したるが如き)が、そのもつとも完備したるものは、「中国俗文学史」(一九三八年初版、一九五四年改版)第六章の「変文」の章であろう。鄭氏は変文とは、仏典を通俗的に「変更」する義なりと論じて、その韻文、散文の混合形式、すなわち講唱体というスタイルに注目し、その特異性、重要性を力説することに所論の大半を費している。鄭氏の眼目は諸宮調、宝巻、彈詞等の文学の遠祖、源流として変文を位置づける点にあつた。この鄭氏の説は長くその後の研究にも影響を与え、変文に関する文学史上の定説となつた感がある。しかしながら鄭氏の所説にもなお多くの疑問がある。変文を「変更」せる經典の義と解すれば、所謂「俗変」——一般故事に取材せる変文——は如何に解するか。又鄭氏は講経文、押座文、縁起等もすべて一応名称は別にしながらも、変文の範疇の中に入れ、その相互の差については詳しい論証を行っていない。更に又変文の韻散文の混合形式についても、具体的な個々の論証に乏しく、又俗講等との関連における、

その講演演出の実態に対する裏付けも豊富とはいえない。従つてその評価も、韻散文混合形式の特殊性、蔵経々典に比し、長篇なること等の文体特徴を挙げるにとどまり、講演という動的な文学を現存テクストの上に如何に見出すかという配慮に欠けている点は否み得ない事実である。鄭氏の所説に対して北京師範大学中文系学生集体編「中国民間文学史」上・下（人民文学社、一九五九年）は別の側面から批判を加えている。その要点は、第一に鄭氏の学説は俗間流行のものをすべて俗文学と断じているが、正しい俗文学、民間文学とは労働人民の生産活動、階級斗争の中から生み出されたものでなければならぬということ、第二に鄭氏の思想は超階級的で、俗間流行の文学の中に潜む、統治階級の麻痺政策によるものと、労働人民のものとを混同し、眞の民間文学を認識評価していないこと、第三に講唱形式をインド文学の影響とのみ断じ、中国民族の創造能力を軽視していること等にある。従つて変文の中でも、目連変文、降魔変文、舜子至孝変文等は統治階級の偽作であり、矛盾と迷信にみちた人心麻痺の文学であり、薰永変文、孟姜女変文の如きは、階級斗争の歴史を反映した眞の民間文学たるにふさわしいものであると断ずる。これらはたしかに鄭説の持つ形式中心主義の弱さを批判しており、歴史的、社会的環境との有機的な関連の検討に薄い同氏の弱点をついているものであり、マルクス主義文学史論の立場よりすれば、当然生起すべき問題であろう。ただこの批判の仕方にも問題はのこる。鄭氏の「俗文学」「俗間流行」ということばが観念的であるにしても、これを「階級斗争の反映」という言葉におきかえるだ

けでは依然として観念論の枠から脱出出来ない。何故なら「民間」といい、「階級斗争」といい、たとえ言葉の上では明瞭に見えても、事実あらゆる作品が、あらゆる形態をとつてあらわれる以上、これらをすべて存在していた実体として把握し、その上に立つ法則性としてこれらの言葉がつかわれるのでなければ、結局は言葉の循環におわる危険性があるからである。その一、二の例をあげれば、第一に「民間文学史」が「俗文学史」の不明瞭な所論の欠点をついたことは確かだが、労働人民の創作のみを民間文学と認めたことはマルクス主義文学史論の立場から見ても一面的なものではないか。何故ならばたとえ所与の文学であつても、長く民間に流行するには、人民の意識、感情が何らかの形で盛り込まれていなければならぬ。つまり血肉化のプロセスを無視出来ないということである。第二に俗間流行の文学のあるものを、統治階級による麻痺戦術とのみ見ることは、一面よりいへば人民に対する大きな不信の表明ともいえる。もし人民の創作力が正しく強固であるとすれば、かかる麻痺的作品を如何なる理由でそれ程に許容したか。その作品の中に当時の民衆のエネルギーを吸収するに足る何物かがあり、又その民衆のエネルギーが何等かの形で反映していなければ、その流行は考えられない。ことに講演という直接的な民衆への伝達方法をとる以上、その点は考慮されなければならない。それを否定することは人民の創作力やその基盤の不当な過少評価ということになる。第三に、人民大衆はたしかに健全で勇敢な一面をもっている。しかし同時に保守的な封建的な面を具有していることは、その本質の如何にかかわらず

事実である。この矛盾するものの複雑な錯綜の上に立つ、有機的なものが人間であり、その集団たる大衆である。これを機会的平面的に切断することなく、作品それぞれの全体的な評価を行うのでなければ、大衆の文学の正確な理解は望み得ない。要するに民衆の持つ複雑なエネルギーを無視して、これを一個の観念的存在と化せしめる危険は、「民間文学史」の変文の評価の中にも、明らかにあらわれており、マルクス主義文学史論としても、なお多くの不毛の箇所を内包しているものといえよう。今後の変文の評価は、鄭氏と「民間文学史」の相互にひそむ観念性を超克する形で為し遂げられなければならないと思う。

鄭振鐸氏の変文の講唱形式に関する所説、それにもとづく変文の文学史的な位置づけ、評価等々の説とならんで、その後の変文研究に大きな影響を与えたものには、向達氏、孫楷第氏等の研究がある。鄭氏の所説が講唱というジャンルの実態、その成立、展開の歴史的裏面に欠けていたことはすでに述べた。向達、孫楷第氏等の研究はその欠陥を補うかの如く、戦前すでにかなり活発におこなわれていた。その主要なるものは左の通りである。「論唐代仏曲」覚明（向達）（小説月報二十卷十号、一九二九）「唐代俗講考」向達（燕京学报十六期・一九三四）「唐代俗講考」（前掲論文の加筆改訂）向達（文史雜誌・第九・十合期・一九四三）「唐代俗講軌範与其本体裁」孫楷第（国学季刊六卷二号・一九三七）等がそれである。向達氏の所説は「唐代長安与西域文明」（三聯書店刊・一九五七）に改訂収録され、孫氏の業績は「論中国短篇白話小説」（棠棣出版社、一九

五三）及び「俗講・説話与白話小説」（作家出版社、一九五六）に集められている。その他にも傅芸子、周一良、闕德棟、趙景深、徐嘉瑞等多くの研究者の研究成果もあるが、それは今暫く措く。さて向達、孫楷第氏らの論考の中心は、講經の舞台であった「俗講」の実態を考証する点に注がれた。即ち変文は俗講の話本であるとする考え方が中心であり、これは基本的には現在までひきつがれている。向氏の所説は「変文」の「変」を清商曲中の「変」歌にその発生を求め、それが唐代寺院の俗講においておこなわれた話本となつたことを力説する。（「唐代俗講考」——唐代長安与西域文明——所収）そして、その俗講の形態の実証に所論の大半を費している。「変」

が清商曲の「変」にもとづくという説は、清商曲中に「変」という特異な送声の実態を裏附けるデータがなく、又敦煌文学作品にも、六朝「変」歌と相応すべき音楽的送声の存在を証明する資料が見当らぬ現在では、単に「変」字の共通によつて生じた推論の域を出ていない。ただペリオ三八四九紙背文書、円仁「入唐求法巡礼行記」卷二、元照「四分律行事抄資持記」卷三等の記録を対比綜合せる俗講の実態の立証は、かなり明確なものといえる。その話本を押座文、縁起を一類、目連変、降魔変、王陵変等を二類、維摩詰關係の諸篇を第三類とし、俗講話本の中心は第三類の所謂「講經文」にあると規定する。この説は問題の本質をとらえた鋭い分析であり、現在なお三考し研究に資すべき点が多くない。勿論押座文と縁起を同系の写本と断じたのは明らかなミスであるし、又その分析が講經文、俗講の範囲にとどまり、講經文と変文の關係、変文の舞台

が果して講經文の舞台たる俗講と同性質のものであるか否か等については殆ど触れて居らず、この点今後の研究の大きな課題の一つとなるであろう。孫楷第氏の説も俗講、講經文、押座文等に力点がおかれている点は向氏の説と同じである。孫氏は變文を「非常之事」を意味するものと理解し、神異を語る「神變」「靈變」、怪異を語る「妖變」とにわけ、これが図示されたものは變相図となり、これを転(かたる)ずるものが變文であり、その内容により經變、俗變にわかれるとする。孫説も又現在のわれわれに多くの示唆を与えるものであるが、「變」義を「變更」と見るか「非常」と見るかは別に論ずるとしても、絵圖の變相と、語りの變文の間に存する關係について論及していないことは惜しまれる。この点については後述の本邦諸研究者の論によつて補う必要がある。 (中国人研究者で變相と變文の關係に論及せんとしたのは傳芸子氏「敦煌的俗文学之発見及其展開」—白川集所収—があるが、他には余り例を見ない。ただ近來の研究にその動向が見られる。)のみならず孫氏の実証も、講經文、押座文にとどまり、變文と講經文の関連に及んでいない点は向達氏の場合と同様である。総じてこれらの論考は俗講、講經文という対俗講唱話本の第一段階にとどまつており、變文という更にフレキシブルな講唱との関連には及んでいなかった。向達氏は後に「敦煌變文集」の導言において、「變文とは唐代俗講話本の總稱なり」と述べているが、こうした問題の解決なしには、未だ極めて漠然たる定義づけという外はなく、今後の開拓を俟つ他はあるまいと思ふ。解放後の中国における變文研究は、そのもつとも基礎的である

資料研究にいちぢるしい進展を示したことはすでに述べたとおりであるが、變文の本質に関する大きな論考は、現在まだ特に重要ともされるものは少ない。ただ最近のいくつかの業績を簡単に紹介して、その後の動向について触れておきたい。解放前においても變文に関する數種の論文を公刊していた徐嘉瑞氏は「我对變文的幾点初步認識」(文学遺產選集第三輯・一九六〇)を発表している。これは元來「文学遺產」第二二期(一九五六年九月十六日)に發表したものの再録であるから、「敦煌變文集」刊行以前のもので、その目錄や内容は周紹良氏の「敦煌變文集録」に拠つたらしい。ここで問題としているのは、變文の本義、範疇、実態等に関する問題ではなくて、もつぱら變文の内容の評価という点にある。その意味では北京師大「中国民間文学史」と同じ力点の置き方に依るものである。冒頭において、變文の舞台は俗講であり、俗講の發生は東晋末に起つた「唱導」に依ると説き、唐代における流行を略述している。これらは向達氏やその他の先学たちによつてすでにくり返し述べられたことを要約したまでで、きわめて簡単なスケッチであり、新説は見当らぬ。特に「敦煌變文集録」では講經文も變文も一括して變文とよんでいるので、それに依拠した徐氏の説では、こうした變文・講經文の区別等は全く問題になつていない。徐氏の論の中心は七十數種の變文を評価することにさかかっている。そして仏教變文についてはその描写や人物形象がヴィヴィッドである点は認めるが、統治階級の麻痺政策により、現実から逃避した文学であると断じている点、「民間文学史」の場合と同様である。ただその評価の

仕方の中に、かなりキメの細かな読み方は窺えるのであつて、「民間文学史」の如く機械的でない点は注目してよからう。たとえば「目連変文」に関して、これを目連と青提夫人の地獄脱出に対する人民の同情がバックとなつており、暗黒社会からの脱出の希求が重なるつていと見ているあたりは、本邦ではすでに指摘されたこと（拙稿「中国民間における目連説話の性格」—仏教史学七の四—でもそれに触れた）であるが、中国でも単なる公式論でない作品個々に即しての評価が、同じマルクス主義文学史論の中でめばえていることは留意しておきたい。そして季布、伍子胥、王昭君、秋胡等の民族故事の変文、更に張義潮、張淮深等の唐末の英雄たちの説話に高い価値を認め、単なる仏教宣伝の変文が次第に消滅したのに対し、目連や如上の民族故事が後代にひろく流布していったことの必然性を述べている。

最後に変文の文章のすぐれている点を、一、二の例により高く評価しているが、それらは鄭振鐸氏の変文の文章評価と同じ線上にあり、やゝそれを具体的に述べようとしたものである。徐氏の論者は基本的には向達、鄭振鐸、周紹良、中国民間文学史等の説をさまざまに形で再現したものであり、特別新しい説を展開したものではない。ただ個々の変文の思想性、芸術性を着実な読みにより深めていくこととする努力が見られる点で、注目しなければならぬ。勿論ここで示された段階では、まだその評価も余りに綜括的、印象的で、実証に欠ける憾みはあるが、鄭振鐸、中国民間文学史等で摸索されて来た変文の内容評価は、今後マルクス主義文学史の立場から更に

つづけられて行く大きな課題であらうし、それが深い分析と理解によつて、より一層具体化し、深化されて行くに違いない芽生えを示しているのではないかと思われるのである。

こうした作品の思想内容の評価とは別の側面（勿論この両者が全く切断されたものではないが）から変文の本質に切り込んだ論考も見られる。程毅中氏の「關於變文的幾點探索」（文学遺產増刊十輯・一九六二）等はその一つであらう。これは「敦煌變文集」刊行後の業績で、依拠したテクストはすべて「變文集」である。程氏の論考は、徐氏のそれとやや方向を異にする。第一章において「變文の名称と来源」、第二章において「變文の体制と影響」、第三章において「變文の題材と意義」にわかれ、變文の基本的な諸問題に一応万遍なく触れているが、變文の發生、本態に関し、大きな比重を持たせている点、徐氏の場合とことなる。（徐氏と共通するテーマは第三章である。）ことに一章、二章については従来の中国の研究者には見られなかつた説や、又新しい観点が示されているので注目を要する。その第一は變文と變相圖の關係を極めて密接なものとして受けとつている点である。

程氏は「変」字の来源を仏家における「変相」と関連させ、変現の姿を图示したものとし、しかしながら胡適の述べる如く、變の義から更に變文の体裁までをインドからの輸入とする考え方に強く反対する。變は元来中国の「變化」の意義であつて、たとえ變相が仏家の言葉でサンクリットの翻訳であつても、それは音訳でなく意訳であり、變文輸入説の根拠にはならぬと断定する。「一つの事物

の来源と語源とは同一でない」(八二頁)という程氏の観点は、変文とインド文学の關係がまだ十分開拓され、全く無關係と断じうるか否かは現在なお問題はあるとはいへ、従来の「変」義の考証が単なる語源論的詮索や、共通の「変」字を恣意的に結びつける操作が多かつたことを思いあわせれば、唐五代という同時的背景の下における「変」の意義機能を追求するという作業に大きな示唆を与えるものであろう。その点は後にも更に触れるが、程氏が変文を交相図の絵解きが本来であり、その他の敦煌文学資料と厳然と区別すべきことを力説しているのは、あるいは本邦研究者の意見が参照されたのかとも思うが、中国における研究が新しい側面に入つたことを意味する上でも、変文の範疇を明確にするためにも、重要な発言と見るべきであらう。程氏は従来研究者が変文という名称を習慣的にあらゆる敦煌文学資料に拡大使用していると論じ、変文と呼ばれるのは、民間の講唱が「ただ交相と結びついた時にのみはじめて変文と呼ばれた」(八六頁)と断ずる。この種の考えは本邦ではすでに二三の識者によつて説かれていた(後述)が、中国では新しい方向を示すものである。

程氏がこうして変文と他の敦煌文学を明瞭に区別せんとする論をたてたのには、変文が民族文学であり、外来文学でないことを主張しようとする意識が多分に存在しており、「われわれは大ききつばに交文によつて、一切の敦煌文学を概括してはならぬ。更に一方的に交文は仏教文学であると考え、従つてそれが外国の仏教徒が伝えたものと考へてはならぬ」(八七頁)と述べている所からも判明する

が、変文の範疇を明確にし、中国文学の伝統と結びつけようとする操作は、今後の進展を期待したいところである。そして本稿に欠けている変文と他の講唱文学の具体的な関連、発展過程等を裏附けて貰いたいものである。

第二に程氏は変文と中国伝統文学の関連を、具体的に賦、駢文等の変形所産と見ようとしていることがある。敦煌本「燕子賦」と曹植の「鶉雀賦」等の血縁關係は韻文にとどまるが、交文中の散文を広義に駢文までを包含すると考えれば、賦の中でも蔡邕「短人賦」の如きものが相応すると説く。その他「伍子胥交文」「舜子至孝交文」等の四六駢体と歌詞の接合を「吳越春秋」等の文体と対比し、その関連を説いている。このようにして主として文体の面からいくつかの例を挙げ、交文の講唱形式、その他の敦煌文学の来源を賦、駢文に求めようとする操作がおこなわれている。これをジャンルの来源と見るか、又文体上の影響關係と見るかは甚だ重要な問題である。特に講唱という動的な文学を理解するには、単なる残された文献の文体上の相似のみによる危険性は厳に警戒しなければならぬ。交文の如き通俗的な口頭説唱のジャンルが、果して詩賦、駢文の世界からうまれたか否かは、今後更に詳細な検討を俟たなければならぬが、程氏の論考はその意味でも大きな問題を提起しているものといつてよからう。程氏は更にこうした文体を後代の各文学と比較し、その系譜や影響を調査し、その主題や人物の人民性、積極性を論ずることも行っているが、それらについては今は触れない。程氏の主張は交文を民族形式と認めること、文人僧侶の文学が民間文学

にとり入れられて行く過程を立証せんとする意図にもとずいているが、単なる観念論におわらぬためにも更に具体的な考証や分析を必要としよう。いずれにせよ、程氏のこうした論考は、最近の中国の史観や方法を含んでいると同時に、これまででない新しい（中国では）観点や、実証も含んでいるので、今後その展開に注目し、綿密に検討して行く必要があるかと思われる。

### 三

既に与えられた紙数を超過しているので、日本と欧州における最近の研究の動向を簡単に附記して、その問題点を指摘しておきたい。本邦における変文研究が、中国の場合よりも更に広範な隣接諸科学の分野で、豊富な角度からの切り込み方が多いことは、すでに指摘した通りである。ただ原資料を持たざる国としてのハンデイは、かなり迂遠な摸索を長期にわたつて強いられて来た観はあるが、中国には見られぬさまざまな問題の提起がなされていることも忘れてはなるまい。変文を講唱文学として評価する立場は、夙に狩野直喜博士「支那俗文学史研究の材料」（芸文七の「七の三。一九一六）によつて報告されており、更に青木正児博士「敦煌遺書「目連緣起」」「大目乾連冥間救母変文」及び「降魔変押座文」に就て」（支那学四の三。一九二七）倉石武四郎博士「目連変文紹介の後に」（支那学四の三。一九二七）等の論文は、僅少な資料のため幾多の不備はありながらも、講唱の形式、絵解きとしての可能性の論証、成立年代の推定、その発展過程等につき重要な問題を提起されて居り、そ

の意義は高く評価しなければならない。変文が変相ときわめて密接な関係をもつものであり、絵解き講唱としての性格があることは倉石博士によりすでに指摘されていたが、戦前においても沢田瑞穂教授の「支那仏教唱導文学の生成」（智山学報・新十三号・十四号。一九三九、一九四〇）等でかなり詳細に論ぜられている。これは戦後更に、小川環樹博士の「変文と講史」（日本中国学会報第六冊。一九五四）で、絵解きたることの実証、後代話本との関連等につき

詳しく論ぜられている。勿論話本と変文の関連、経変、俗変の発展過程、講經文と変文の關係等々未開拓の分野も多く、「王陵変文に絵解きの証左がない。」（七九頁）と論ずるが如き仮違はあるが、これらの研究を土台として、更に研究を進化させていくことが必要であろう。変文と変相図の関連をもつとも徹底した形で論じたのは、梅津次郎氏の「変と変文」（国華七六〇。一九五五）であろう。梅津氏は戦前から長い伝統を持つ小野玄妙、松本栄一氏らの敦煌画の研究を更に発展させ、ペリオ本の降魔画巻変文（ペリオ四五二四）等を援引して絵画に附属せるものとしてのみ変文を理解すべきことを力説し、中国の研究者はもとより、沢田、小川両教授の説の中にも潜む、変相と変文を平行的に眺めようとする説を批判し、あく迄も絵画に発する一元的なものとして変文を把握している。その美術史的な論証は綿密であり、変文研究に一つの大きな示唆を与えた。特にその絵解きの淵源は西域各地にも及び、甚だ重要な問題を提起している。そもそも中国の研究者が変文を民族形式として理解せしめるために、変文の文体を過去の文学の中に来源を求めようと努力



する(程毅中氏等)のは、文体、構成の影響関係を明らかにするには重要な作業であるが、文体のみで変文という講唱文学の発生を論ずることは出来ない。程氏自身も認める如く、変文は変相凶と結びついてのみ成立し得るのだとすれば、絵解き講唱というジャンルが、中国の伝統形式の中に存在していたのか、それとも外来文化の流入によつて齎らされたのか、先ずその点にこそ、もつとも重要な論考のポイントがなければなるまい。自ら絵画の存在こそ変文成立の充足条件という以上、絵解きという問題を抜きにして、文体の問題からのみ民族形式を論ぜんとすることは、自家撞着でもあるし、問題の本質をそらしてしまう危険がある。梅津氏の論の当否に對してはさまざまの反論もあるが、その論文を読むと、程氏らの論考にひそむ矛盾や弱点を明瞭に読みとることが出来る。ただ変文として残るテキストにも絵画との関連、講唱性の乏しいテキストもあり、これらを如何に解決するかは今後の課題であるし、梅津氏の論が程氏とは逆に文体、構成、言語に関して甚だ薄いことは認めなければならぬ。同じく美術史的な考察には秋山光和氏の「変文と絵卷」(文化史懇談会報三三。一九五五)「敦煌本降魔变(牢度叉斗聖变)画卷について」(美術研究一八七。一九五五)等がある。仏教史、社会経済史的な立場から、変文、俗講等の性格をきわめて行くとする研究も甚だ盛んであつて、那波利貞博士の諸論文はその点にきわめて綿密である。戦前の「中唐時代俗講僧文淑法師釈疑」(東洋史研究四の六。一九三九)、戦後の「中晚唐五代の俗講の座における変文の演出方法に就きて」(甲南大学論集二、一九五五)

「俗講と変文」(仏教史学、一の二、三、四。一九五〇)「変文探源」(橋本博士記念論叢、一九六〇)等は寺院と民衆、俗講と変文の関係を詳細に論じたものである。押座文と変文を同一とみる等の誤り(「俗講と変文」)はあるし、なお検討を要する点も少くないが、「誘俗」なる講唱話本集の実態を明らかにする等、大きな分野を開拓している。同じく俗講、変文の発生、展開の過程を明らかにせんとしたものに道端良秀教授の「唐代仏教史の研究」(法蔵館、一九五七)があり、とくに第二章、第二節の「仏教徒の民衆教化」に関する章が詳しい。従来の説を整理し、あわせて俗講の本態を細かく規定し、遊行僧等による対俗講唱を論証する等、従来の漠然たる俗講、変文の関係を更に一歩すすめて論じたものということが出来る。又仏教思想と中国伝統倫理の接触についての論考も同書に収録されており、裨益される点が多い。又敦煌という特殊な仏教文化圏との関連も変文を考える上に重要な問題となるが、藤枝晃氏の「沙州帰義軍節度使始末」(東方学報、京都十二冊三、四分、十三冊一、二分。一九四二、一九四三)等を始めとする論文に多くの示唆と問題がふくめられている。変文の思想内容、説話としての性格、その題材等については本邦では比較的少いが、西野貞治氏「敦煌俗文学の素材とその展開」(人文研究一〇ノ一一。一九五九)「薰永伝説について」(人文研究六の六、一九五五)「敦煌本搜神記について」(人文研究八の四、一九五七)小川陽一氏「変文の構造」(集刊東洋学三号一、九六〇)「葉浄能詩の成立について」(東方宗教一六、一九六〇)「変文の周辺」(集刊東洋学七号、一九六二)等がある。

筆者も曾て「舜子至孝斐文の諸問題」(大倉山学院紀要二、一九五六)、「中国民間における目連説話の性格」(仏教史学七の四、一九五九)等でその一部に触れたことがある。しかしながらこの種のところみは本邦ではきわめて遅れており、解説の進展とともに一層開拓されなければならない分野であらう。

総じて本邦の研究については多彩で、豊富な分野の展開が見られるが、それらが斐文という有機体の研究に充分結集してはいないという点があり、斐文の範疇、定義に關してもなお未解決のものが多い。筆者の「On the word Pien」(Toyo Univ. Asian Studies 1, 1961)はこうした点に關し、根本資料の再検討を主張したものであるが、本邦の研究者には、根本資料の基礎研究による実証が、もつとも望まれることと思う。国文学との関連を説くものとしては川口久雄教授「敦煌斐文の素材と日本文学」(日本中国会報八、一九五六)、「八相成道斐文と今昔物語集仏伝説話」(金沢大学論集四、一九五六)や永井義惠氏の「日本仏教文学研究」(古典文庫、一九五七)の第二篇第二節、第三篇第一節の論考等が参照される。岡見正雄「絵解きと絵巻」(国語、国文学二四〇)も美術史との関連の下に、比較文学的に斐文をあつかつたものである。これらの分野の研究もまだその数が多いとはいえないが、比較文学的に斐文を扱う以上、その媒体となつたものの実態を明らかにすることが急務ではあるまいか。斐文の解説や、資料的研究に必須の言語的な研究については入矢義高教授の「索引」(前号参照)をはじめとする労作や、大田辰夫教授の「中国語歴史文法」(江南書店、一九五八)等があり、こ

れらを土台としての斐文のグロッサリーの集成が、きわめて重要な仕事となるであらう。水谷真成教授「一誦の意義」(大谷支那学報二、一九五七)等は斐文の本質にも関する試論で、単なる語義論の枠にとどまるものではなう。

欧州における研究は、前号で述べた如く資料研究に見るべきものが多く、もつとも基本的な課題に取りくんでいる感があり、斐文の本質論についてはそれ程多くない。ジャールズ博士(L. Giles)の「Dated chinese Manuscripts in the Stein collection」や「Descriptive catalogue of the chinese Manuscripts from Tun-huang in the British Museum」(1957)等は王重民氏の「敦煌古籍叙録」(商務印書館一九五八)等と同様、もつとも依るべき解題目録であるし、マレー氏(A. Waley)の訳業に關しては前号で触れた通りである。フランスマンにおいてはギール・エッセル教授(P. Demieville)の「Les début de la littérature en Chinois vulgaire」(Institute de France, Académie des Inscriptions et Belles-Lettres 1952)「Langue et Littérature Chinoises」(Résumé des cours de 1956-57, 1957)、「Langue et Littérature Chinoises」(Résumé des cours de 1957-58, 1958)等のレジュメに含まれた論考があり、ニコラ女史(Vandier-Nicolas, N)の「Sriputra et les six Matres d'Erreur」Facsimilé du manuscrit chinois 4524 de la Bibliothèque Nationale (Mission Pelliot en Asie Centrale,

serie in quarto V. 1954) 等の重要な資料紹介も忘れてはならない。(梅津次郎、秋山光和氏前掲論文)

總じて欧州の研究は豊富な資料研究と、敦煌画の研究がまだ平行しておこなわれて居り、その有機的な結びつけが実現したとき、大きな影響をもたらすに違いない。東欧、ソビエトにおける研究も注目する必要がある。チエコスロバキヤのヤロスラフ・プルシエク (J. Prusek) 教授の “The narrators of the Buddhist Scriptures and religious tales in the Sung period” (Archiv Orientalni X 1938) “Reserches into the beginnings of the chinese colloquial short stories” (Ar. Or. XXV. 1957) 等の文学史的研究を更に溯及したウエネンエスラウ・ハルドリチコヴァ女史 (V. Hrdlickova) の “The first translations of Buddhist strras in Chinese literature and their place in the development of storytelling” (Ar. Or. 1958) は訳経が更に講唱に展開する、いわば変文俗講の前段階を説いた力作であるが、最近更に “Some questions connected with Tun-huang Pien-wen” (Ar. Or. 30 1963) において、変文の根本資料を整理し、従来の諸説(主として中国、日本のもの)を検討し、今後の論考への前進を示している。ソビエトにおいてはリフチン氏 (B. П. Ифшин) が “Окзание О Великой Стене И Проблема канра в Китайском фольклоре” (長城伝説と中國民間伝説形態の問題) (ИЗДАТЕЛЬСТВО ВОСТОЧНОЙ ЛИТЕРАТУРЫ. 1961) において、孟姜女説話のきわめて詳細な分析と転変過程に関する論証を行っ

ているが、敦煌資料についても注目すべき点が多い。リフチン氏には他に敦煌文学に関する論考もある由だし、又メンシコフ氏の変文に関する業績が公刊されている旨、中央大学島崎教授からの東洋文库敦煌室宛の私信にも見えているが、未見のため、その内容については後日に期する他はない。本邦及び欧州に関する紹介は全く単なる論文の羅列におわつたが、本稿は紙数の関係でこれにとどめ、未見の文献を入手以後、その紹介を含めてあわせて改めて紹介、検討したいと考えている。(一九六四、一、一〇)

(東洋大学文学部助教授)

(附記) 本稿においては変文の本質に関する総説的な論文の紹介が中心となつた。個々の変文、講経文、白話詩、賦、曲子詞等の研究も各国において、かなりの数にのぼるが、その紹介と検討はすべて省略せざるを得なかつた。これ又後日に期したい。